

## 研究計画書

ゼミ名	平井ゼミⅡ	チーム名	黄色い研究機関より
タイトル	帝国主義の本質		
テーマ群	f) 歴史・思想		
メンバー	杉立諒平、大西央海		
研究計画内容	<p><b>【研究目的】</b></p> <p>本研究の目的は、日本植民地期台湾のバナナ産業を取り上げ、生産面から見たバナナが植民地農業において果たした役割を考察し、本国が必要とした米・砂糖の二大農作物以外の存在意義を明らかにすることである。</p> <p><b>【研究内容・方法】</b></p> <p>日本帝国における植民地政策は、本国における米・砂糖の食料原料基地としての役割（植民地から本国へ）に加え、本国で生産された工業製品を植民地へ移出するという関係によって成立していた。米は内地需要を満たすため、また砂糖は貿易赤字解消のために増産されており、これまでの先行研究においては、これら二大作物にのみ焦点が当てられていた。しかしこれら二大農作物のみでは植民地農業の全容は解明できない。そこで、はじめに台湾の植民地農業の全体像・成長過程を把握し、米・砂糖に次ぐ生産量第三位のバナナについて概論を示す。続いて特に生産量の多かった高雄、台中州を取り上げ、生産拡大の要因に焦点をあてる。最後に、特異な拡大成長を遂げた高雄州に着目することで、本研究の論点に答える。</p> <p>研究方法としては、各種統計・記述資料を分析し米・砂糖と比較検証していく。</p> <p><b>【期待される成果】</b></p> <p>上記の目的意識を持って研究すると、本国が増産に力を入れた米・砂糖（植民地農業）と、その他作物（非植民地農業）では成長過程に明確な違いが見られるはずである。よって、このことから帝国内における経済的利害関係の一側面を明らかにすることが期待される。</p>		